

せ と る

く お ー た り ー

# C.E.T.L. Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.15

発行日 July 17, 2004

## 巻頭言 語学教育(WLC)の試み

ワールドランゲージセンター長 田中 亮平

創価大学ワールドランゲージセンター（以下 WLC）には、現在 15 名の専任教員が所属しています。担当科目は全員が英語で、ネイティブの教員が中心です。開講科目は多岐にわたっていて、スキル別に重点をおく科目をはじめ、TOEFL および TOEIC のスコアアップに的を絞った科目があります。これらの科目は共通科目ですが、科目ごとに統一シラバスが作られ、共通の教科書が使われます。また成績評価も統一を図り、科目ごとの評価基準を設定しています。さらに共通科目以外にも、「専門科目を英語で学ぶ」というコンセプトに基づいて、経済学部や環境共生工学科をはじめとする学部学科と協力して開講する科目もあります。

こうした科目群を担当する教員が質の高い語学教育を提供するために、WLC は所属教員の FD 活動にも積極的に取り組んでいます。

FD ワークショップの開催: WLC の英語科

目の中で、読解や聴解などのいわゆる「受動的」スキルや、文法や語彙などを主眼とするものについては、達成度を測定することが比較的容易にできます。しかし口頭表現能力はその測定が困難で、教員の側にそのための特別な訓練が必要とされます。こうした点から WLC では口頭表現能力の成績評価をより客観的なものとするために、スピーキングにも統一評価方式を設定しています。

また年に一度、口頭表現能力の試験と評価法についてのワークショップを開催してきました。TOEFL にはこうしたスピーキングの評価法が備わっていないため、イギリスやコンウエルス諸国の英語能力試験である IELTS の専門家を招き、三年前から毎年一回開催しています。受講した教員は IELTS の試験官として公式に認定されることにもなります。

このほかに教科書出版社や著者を招いての教科書使用についてのワークショップや、

CALL 授業のノウハウについての講演、さらには自主的な研究会なども開催しています。

**相互授業参観の実施:** WLC の基本方針として、原則として年一回、専任教員は全員が任意の同僚の授業参観を受けることにしています。ただし参観に当たっては、必ず両者の間で事前打ち合わせと事後の検討会をあわせて実施しなければなりません。これは参観される側の心理的負担を軽減するためと、教授法の改善のために、より効果のある授業参観に

していくためです。事後の検討会では、評価的なコメントは控えるようにし、もっぱら関心のある事項について参観者の側から質問をする形式を取ります。

以上 WLC の FD 活動の一端を紹介してきましたが、今後も CETL を初めとする学内諸機関と連携を取り合いながら、語学教育の立場から創価大学の学士課程教育の充実発展に貢献していく所存です。

## 授業見学会とサロンを開催

第1回教育サロンが5月28日(金)に CETL アネックスにおいて開催された。リッチモンド・ストゥループ先生 (WLC 副センター長) が「WLC の相互参観システムについて」をテーマに、話題を提供して下さった。「相互参観システム」とは、教員がペア (あるいはグループ) になって授業を参観する技法のことを指す。授業改善のためにはきわめて有効であるとして、活発な意見交換が行われた。

6月15日には元イスラエル Kibbutz Teachers College の講師、シャラン (Yael Sharan) 先生をお迎えして、第2回教育サロンが開催された。シャラン先生は協同学習法の国際的トレーナーとして活躍されている。教育サロンでは Group Investigation (GI) と呼ばれる協同学

習法をご紹介いただいた。これはシャラン先生ご自身が研究・開発されたもので、協同学習の4技法の一つに数えられているものである。日ごろの授業で活用しているグループ学習の方法を改めて捉えなおす絶好の機会とすることができた。



シャラン先生

続いて、2004年度第一回の授業見学会が6月

18日（金）に開催された。今回は、文学部の石神豊先生「人文学概論Ⅰ」の見学をお願いした。2時限目にもかかわらず、C308教室は受講生で溢れており、学生は講義内容に真剣に耳を傾けていた。



石神先生

放課後には、CETL アネックスにおいて石神先生を囲んでの第3回教育サロンも行われた。授業改善に向けての取り組みについての

意見交換が活発になされた。

さらに、第4回教育サロンが6月29日（火）にCETL アネックスにおいて行われた。小林登史夫先生（工学部環境共生工学科）には「学生自主勉強活動の活性化 - 2つの試作方策の紹介 - 」と題して、日ごろの授業実践のご紹介をいただいた。小林先生は学内LANを通じた軽度レポート課題の多数回均等配布システムや6名程の小グループによる協同授業と相互評価システムを活用して、授業の改善を進めてられている。

5月後半から6月後半にかけて、毎週のようにつながって教育サロンが開催されたのは、初めての試みである。CETLでは今後も先生方の授業実践を通して、授業改善を目指した教員相互交流の機会の提供に取り組んでいく。

### 授業公開の実施者紹介

- <経済学部> 長谷部秀孝、馬場善久、寺西宏友、堀 元、高橋一郎、神立孝一  
高木功、小林孝次
- <法学部> 小島信泰、加賀譲治、花見常幸
- <文学部> 中野毅、山崎純一、杉山由紀男、宮田幸一、石神 豊、坂井孝一、李 燕  
中村泰朗、田中亮平、藤沼 貴、石原忠佳、小崎晃義、三井啓吉、村手義治
- <教育学部> 園田雅代、坂本辰朗、清水由朗、関田一彦
- <経営学部> 渡辺隆之、岡田 勇、植田欣次
- <工学部> 小林登史夫、新津隆士、田口 哲、伊藤佑子、久保いづみ
- <通信教育部> 西浦昭雄
- <平和問題研究所> 小出 稔

## 授業アンケート集計結果のまとめ

昨年度後期に行った授業法に関するアンケートの集計結果がまとまった。主な特徴について報告する。まず、学期はじめにシラバスを配布し、その授業の学習目標を説明する教員はどの程度いるのかを確認した(表1参照)。なお、ここでいうシラバスとは講義要項の記載内容に加え、毎回の授業トピックや予習範囲、課題提出日や提出手順、参考図書リストや教員とのコンタクト方法などを含む授業計画書のことである。

表1 学期始めにおける授業計画説明の程度とシラバス用意のクロス集計

授業計画説明の程度	シラバス準備の頻度			合計
	いつも	たまに	しない	
時間をかけて行う	30	3	4	37 (41.6%)
簡単に行う	32	6	11	49 (55.0%)
行わない	0	0	3	3 (3.4%)
合計(人)	62	9	18	100

注) ( )内の百分率は合計 89 人に対して算出したもの

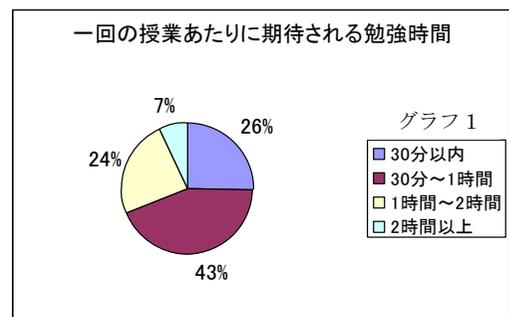
本学では(少なくともアンケートに協力戴いた先生方の中には)学期はじめに授業計画を説明しない教員はほとんどいない。知的冒険の出発にあたって、旅程を確認しておくことは大切である。その意味で、97%の教員が授業計画を説明しているのは素晴らしい。ただ、どの程度詳しく行うかはそれぞれの教員の判断である。41.6%の教員が時間をかけて

説明し、55.1%の教員は簡単に行っている。

加えて表1に示す通り、シラバスを準備する人は、学期はじめに授業計画を説明する割合が高く、シラバスを用意しない人の中では説明しない割合が増す。旅行に際して、旅のしおりのような行程表が手元があれば安心なように、学生にとっても学期を通じての授業の流れが確認できる資料が配布されるのは嬉しいことだろう。

### \* 授業あたりの勉強時

履修単位の上制限が導入され、科目あたりの勉強時間増大が目指されている。この制度の良し悪しは別にして、アンケート結果からは本学の教員が学生に期待する平均的な勉強時間は30分~1時間程度であることが示された(グラフ1参照)。無論、科目の性格上あまり予習を要しないものもある。ただ、1コマあたりの予習時間を2時間以上とするのが、大学の講義科目における前提である。



勉強しろといっても何もしない学生が多け

## 特集 授業方法について考える

れば、教員の側の要求水準も低くなっていく。そうした学生たちの学習意欲の乏しさが問題なのかもしれないが、大学の2単位の意味を教員の側も軽んじてはいないだろうか。

期待する勉強時間が長いということは、それだけの勉強を必要とする課題や作業を学生に要求する授業ということであろう。そうなれば、課題達成や予習復習の有無あるいは適否を確認する必要性も高くなる。実際、長時間の勉強を要求する授業ほど、宿題の提出を求めたり任意に学生を指名して予習の度合いを確認したりといった、予習状況の確認作業を行う割合が増している（表2参照）。

表2 期待する勉強時間と予習確認のクロス集計

期待される勉強時間	予習確認の有無		比率 (倍)
	なし	あり	
30分以内	11	11	1.00
30分～1時間	14	23	1.64
1時間～2時間	4	17	4.25
2時間以上	1	5	5.00

ただし、履修者の数が増えれば確認作業に費やす時間も増えていく。予習してきた学生を相手に講義するとなれば、それだけ講義する側にも準備が要る。したがって、学生に勉強させればさせるほど、教員自身も新たな労力が必要となることを覚悟せねばならない。

最後に学習目標の説明頻度と教歴の関係に

ついて述べる。授業毎に何を学ぶのかを明示する作業は、時としてわずらわしいと感じるかもしれない。授業には流れがあり、各回の講義の繋がりは自明なのだから、学習目標や講義のポイントを一々はじめに説明する必要などないと私たち教員は思いがちである。

ところが、学生たちは必ずしも各講義の繋がりに各講義の目標を、きちんと意識して授業に臨んでいるとは限らない。試みに学生に尋ねていただきたい。「今日は何を勉強に来たの?」「何を理解するために来たの?」といった問いかけに、怪訝な面持ちで首をかしげる学生の多さに気づかれるであろう。予め学ぶべき目標がはっきりしていて授業を聴くのと、ただ何となく聴くのとでは結果の違いは明らかであり、授業のはじめに学習目標を説明する意義は大きい。

では、実際にどの程度の先生方が授業はじめに学習目標を説明されているのか、教歴の比較的短い(10年以内)の先生方と比較的長い(11年以上)先生方とに分けてみた(表3参照)。全体としては9割近い教員が毎回あるいは時々学習目標を説明しており、素晴らしい。中でも、教歴の短い先生方の7割以上が毎回授業はじめに学習目標を説明している。一方、説明しない、あるいは例外的にしか説明しないと答えた教員のほとんどは教歴の長いベテランの先生方であることが示された。

## 特集 授業方法について考える

むろん、授業内容によっては目標説明が不要であったり、あるいは非常に困難なこともある。ただ同時に、教え慣れてくると、つい自明のこととして説明を省略しがちになるのも日頃経験するところである。

今回の授業方法に関するアンケートには対象教員の3割近い先生方に回答戴いた。結果

も全体として、先生方の授業への意欲的な取り組みが窺えるものとなった。自由記述欄への回答も興味深く示唆に富むものが多かった。紙幅の都合上、今回の報告では省略するが、今後 CETL が行う教育支援の貴重な参考資料として活用していきたい。ご協力戴いた先生方に改めて御礼申し上げる。

表3 学習目標説明頻度と教歴のクロス集計

教歴	授業開始時での学習目標の説明頻度				合計
	毎回する	時々する	滅多にしない	しない	
1～10年	14(73.7%)	4(21.1%)	1(5.3%)	0	19(100%)
11年以上	36(52.9%)	23(33.8%)	4(5.9%)	5(7.4%)	68(100%)
合計(人)	50	27	5	5	87

注) ( ) 内は教歴ごとに算出した百分率

## 私の授業改善法

教育学部 大崎 素史

授業は学生のためにあるもの。そのために私が特に意を注いでいることは、授業内容に対して学生の問題意識を喚起することです。というのは、授業に臨む姿勢が受身的になりがちな学生の傾向を少しでも無くすとともに、教科書には触れられていない生の現実状況を知らせることによって刺激を与えたいと考えているからです。

今回述べさせていただく授業改善法とは、その一端として授業の導入時の工夫です。な

お、私の担当科目は、ゼミを除くと教育学概論、教育原論、教育行財政学、教育行政です。

2002年度からゼミを除くすべての授業のはじめに5～10分間「Weekly News」「Weekly Essay」と題して週間教育情報を2～3例、黒板にテーマと出典だけを板書して、内容は朗読して紹介しています。情報源は一般紙からです。たとえば、「自民改憲案・政教分離見直し—伝統行事対象外に・靖国参拝、決着狙い—」(5月30日毎日新聞1面)などです。[Weekly

## 特集 授業方法について考える

Essay]は新聞の記者コラム欄や読者からの声や識者の提言・主張などからの紹介です。その日の授業のテーマとは直接には関係なくても、いわばテレビやラジオのニュースやニュース解説の思いでの紹介です。質問も受けませんが、その時は、自分で検索しなさい、調べなさい、関連図書を探しなさい、と対応することになっています。

授業アンケートをはじめ口頭での好評をか

なりに得ているので、これは続けたいと思っています。

教育学関係の授業であるため講義内容の導入には充分役立っていると思っています。授業アンケートでも好評のようであり、何よりうれしいことは多くの受講生が懸命にノートをとっている姿です。

## A Brief Description of the World Language Center Courses

### at Soka University

Michael Riley

World Language Center (WLC) courses at Soka University are unique primarily because they are conducted exclusively in English by native-speaking English teachers. The teachers in the WLC hail from several countries where English is the official language of communication. The United States, Australia, England, and India are all represented among the teaching staff. Not only is English taught in our classrooms, but the cultures of these countries are examined as well. Students derive the benefit of exposure to the lifestyles and values typical of their teachers' home countries as well as instruction in the English language. Idioms,

colloquialisms, nuances and cultural references contained in the English language are addressed in WLC courses taught by native-speaking faculty.

The focus of all WLC classes is on communicative language use and instruction. Students work in pairs and groups to practice newly-acquired language and skills under the direction of the instructor. The instructor not only introduces new language items (structure, vocabulary, usage, pronunciation, appropriateness) but serves as a facilitator in the classroom as students put these items into practice. All four language skills are addressed in WLC courses, that is, reading,

writing, speaking, and listening. Since WLC teachers do not speak Japanese in class, students must rely on their own English language resources to communicate with both other students and the teacher while in class. While this may at times be stressful for some students, the overall success of English-only communicative courses has been a direct result of this approach. In bi-annual evaluations, students have continually attributed the English-only approach to their language development.

In addition to skills-based classes offered to students at lower levels, the WLC offers courses that focus on content such as global issues, topics which are of much concern and interest, particularly to Soka students. Not only are students acquiring new language items and patterns, but they're putting into practice the ability to discuss current events and issues that every university student needs to develop. Students are learning about topics such as environmental issues, intercultural relations, gender issues, human rights, the current political situation both in Japan and abroad, and global literary trends. WLC instructors give students the skills necessary to discuss, debate, summarize, and present issues such as these in English.

When students returning from studies abroad have been polled about what the biggest challenges were while in foreign classrooms, the typical response has been that they're not sufficiently equipped with the skills required to participate in group or class discussions. The WLC has, as one of its primary goals, the task to instill in students the skills necessary to successfully participate in a discussion, in English, regarding issues pertinent to all individuals.

One of the biggest challenges the WLC instructors have is assisting students in developing their critical thinking skills. For many students enrolled in WLC courses, it may be their first exposure to a foreign teacher as well as to a different set of expectations from that teacher, including the sole usage of English in the classroom. Students are encouraged to assume responsibility for their own learning, develop opinions and express them without fear of being judged, and analyze and critique a situation so that they might be on par with their fellow students around the globe. Many Soka students enroll in WLC courses with the intention of one day studying abroad in English-medium universities. The WLC is responsible for assisting students in attaining

that goal. By challenging students in addition to generating and facilitating intelligent discussions in the classroom and by fostering critical thinking skills, the instructor is enabling students to develop the “process” by which they may successfully compete with their peers in an international setting. This process is one that begins in the

lower levels of all WLC courses and continues until the completion of more advanced courses. This educational process is one which the WLC hopes will continue to contribute to students’ professional lives beyond the classroom.

## よりよい授業を目指して

ワールドランゲージセンター 尾崎 秀夫

ワールドランゲージセンター講師として、これまで英語コミュニケーションや TOEFL 対策などの科目を担当してきました。その中で最も長く受け持っているのが、英語コミュニケーション基礎という科目です。担当し始めた当初は、履修者の大変多い科目でした。その中で、コミュニケーションの授業をいかに成り立たせていくかということが、一つの課題となりました。外国語教授法については、外国語教育専攻の大学院時代に基本は身につけていたつもりでした。しかし、現場に立って見た時に、それまでの理解や経験の上に、さらに工夫や改良を加えていかなければならないことを痛感しました。以来、学生さんに満足していただける授業を行うため、積極的に語学教育に関する研修、研究報告会などに参加し、知識を広げ、技術を磨く努力をして

います。(この点、ワールドランゲージセンター内でも FD 活動が活発に行われており、企画される研修などに参加してきたことは大いにプラスとなっています。)

過去3年間の試行錯誤を経て、目下以下の3点を自身の授業改善の柱としています。一つは、コンピューターを利用した語学教育で、授業の内、外で学生さんが効率よく学べるよう配慮しています。コミュニケーションの授業では、学生さん一人一人に平等に話す、聞くといった練習をする時間を確保することが大切だと思います。もし大人数のクラスで、教師が数人の学生さんの相手だけをしていれば、その間他の多くの学生さんはそのやりとりを聞いている他ありません。この点、語学用コンピューターソフトを利用すれば、各自がソフトを操作し、話す、聞くといった練習を全

## 特集 授業方法について考える

員行うことができ、均等な練習の効果を期待できます。次に、外国語教授法として、**proficiency-oriented teaching** という方法を採用し、その効果を実感しつつも、自分なりに現在のクラスの実情に沿うよう改良を続けています。この教授法は学習者が現在もっている能力をできる限り引き出して、クラスでの活動に取り組みせようというものです。この教授法の実践とともに、背景にある理論の再確認や、関連する先行研究の読了なども進めています。最後に、ペアワーク、グループワークの充実です。外国語コミュニケーションの科目では、ペアワークやグループワークは非

常によく利用される活動形態です。しかし、外国語教育におけるペアワークやグループワークの質の向上という点においては、まだ改良の余地があると思われます。今後、CETLが推進する協同学習の理念を外国語教育に取り入れて、より価値的なペアワーク、グループワークを創り出して行きたいと思っています。

授業の改善という問題は、教員にとって生涯にわたる課題と捉えています。今後も自己研鑽を怠らず、また多くの他の先生からも教えを請いながら、よりよい授業を行えるよう努力していくつもりです。

### Information

#### ○後期の窓口業務開始の日程

CETLの後期の窓口業務は9月15日（水）からとなります。

月曜日～金曜日 12時30分～17時

#### ○FD 関連セミナーの参加者決定のお知らせ

「ケイガンストラクチャによる協同学習法」（場所：フロリダ）には、関田一彦先生（副センター長）と尾崎秀夫先生（センター所員）の参加が決定しました。

「各種協同学習ワークショップ」（場所：ミネソタ）には、同じく関田先生が参加されます。

### 編集後記

編集作業が難航しましたが、なんとか夏休み前に発刊することができました。

授業改善を目指す教員の相互交流の橋渡しとして、これからもCETLは地道に実績を積み上げていきます。(U)

C. E. T. L Quarterly No. 15

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町 1-236

Tel : 0426 (91) 9782 内線 : 2146

E-mail: cetl@soka.ac.jp